
EXPERIMENT{螺旋ゲーム}

season

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EXPERIMENT「螺旋ゲーム」

【Nコード】

N1774BA

【作者名】

season

【あらすじ】

各国主導で行われる新人類整合計画、通称Jaula。その実態は人間を生物兵器として軍事転用するものだった。莫大な予算と秘密裏に移動される多大な人命。その圧倒的な質量を投入してこの計画は成り立っていた。

華僑の末裔リー。謎多き計画者サイドの女性G。さらに各能力者と実験体の人間達。彼らを絶海の孤島で待ち受けるJaula計画の要となる巨大なメガロポリスを模した都市に総ては送り込まれた。そして、そこでのサバイバルゲームは弱肉強食の殺伐としたものへ

と加速する。最後に残っているもの一体誰なのか？
神でさえ知ることは出来ない・・・。

EXPLOSION

今日は厄日なのだろうか？

少し前までは総てが最高だったはずだ。それなのに何で？　なんでこうなるのよ。折角有給取れて、それで直と翔君と健と一緒にこの島に来て午前中はあのマリンスプルの麗な海で海水浴して、それからレストランで4人で昼食とって午後はビーチでゆっくりで、それからホテルで……って感じだったのに。
なんでこうなったの？　どこで間違えたの……。

「香奈、今度の夏に思い切って長い有給取って海外行かない？」

私は急に電話越しで切り出された。相手は高校来からの付き合いのある友人、石浜直美だ。常にアクティブで明るい性格のため周りに信頼や人望が篤い。まあ、唯一の難点としては性格が結構直情的なところが多く様々な人間関係の中で結構トラブルが絶えない点だ。しかし、後に引かないそのサバサバとした性格は男女問わず好かれている。なんとというか常に付き合いたい人間ではある。

「でも、いきなり海外ってのは……お金とか全然貯めてないし」かなり、急で唐突な話にすっかり戸惑ってしまった。なんで、急にこんなこと言い出したんだろう？

「大丈夫だって。ちょー格安のパッケージツアーがあつてそれに便乗するし、それに中島の奴覚えてる？　あいつさー旅行会社に勤めたつばくて、それで優先券やらなにやらで安くなんのよ」

「それでも海外でしょ。色々お金かかるし、治安とかも悪いでしょ。それにまだどこにくかも聞いてないよ」

「それじゃ、教えたら行ってくれるんだよねー？」

「う、そこまではまだ決めてない、ていうか決めれないよ。メンツとかも全然聞いてないし」

「あー、はいはい。まずはあたしでしょ、あんたでしょ、それに不

本意なんだけどやっぱ今回の旅行お膳立てしてくれたんだから健次の奴も連れて行かないと悪いしね」

「それじゃ、3人ってこと？ それじゃ結構淋しくない？」

そう言っていると、受話器越しで勝ち誇ったようなフンという音が聞こえた。

「あんたがそー言うと思って、今回は超VIPを呼んだわよ」

「何、直にそんな人脈あったの？」

「なっ、失礼ね。それくらい、いくらでもあるわよ。ていうか、本題はそこじゃないのよ。いい、折角あんたのために呼んだんだから成功させなさいよ！」

「成功？ なにを？」

「翔君呼んだんだから」

「えー！！！」

私はベッドの上で跳び上がった。なんて余計なことをしてくれたんだろうこの人は。まともに顔を見て喋れもしないのにどーしよう・・・。

でも、よく考えたらこれは好機チャンスかもしれない。このまま電撃的に告白出来るかも・・・。

「わかった・・・、少し考えてみる」

「そうそう、あんたは顔もプロポーションも悪くないんだから、後はその性格さえ前面出せれば落ちない男なんていないよ」

「ちょ、何言ってるのよ、直！」

「ほらほら、照れない照れない。そういうとこ直せばいいのよ」

「うー」

「それじゃね！また連絡ちょーだい」

「わかった、バイバイ」

受話器を置くと私は「はぁ」とため息をついた。結構急な話だが特にこれといった用事あるわけでもないので会社からも夏休みとして一週間くらいは取れるだろう。こうなってしまったんだからいつそ思いつき行ってみよう。それじゃ、取り合えず現地の情報をネット

を……あれ、直どこに行くか言っていないじゃん！！

同刻の全く異なった国のある地域のスラム街

男はひたすら走っていた。何かを警戒するように。何度も何度も周囲を見回していた。だいたい100メートルおき辺りを探り、150メートルおきくらいに逐一立ち止まる。立ちまっただ男の手には金属独特の光沢を放つ大型のミリタリーナイフが握られている辺りからもここは日本とはまるで異なる異質なアウトローの臭いを感じさせる。つまり、ここは平和ボケしたような日本人の悪ガキやらチンピラが仕切っているような生ぬるい乳臭ささえするような世界とは一線を画するのだ。その生粋のアウトローさえも焦らせるものとは一体何なのだ？

その正体は思っただほどに恐怖を煽るような容貌はしていなかった。いくつかのグループ分かれた集団だった。グレーの統一された上着で顔まですっぽり覆って個々人が判別さにくいようになっていた。

「Dammit」（畜生が）

明らかにアジアンの顔をしている青年の口から出た言語は英語だった。もちろんこのありとあらゆる負の部分の溜まり場のような街では英語自体もさほど珍しいわけではない。しかし、全力で走りぬけながら時々スラングを吐きまくる奴はなかなかお目にかかれない。

「止まれ、止まれ。5秒以内に立ち止まらないと実弾を発砲するぞ！」

そんな風に残るから拡声器でも付けたかのような大声でわめき散らす集団。しかも、ふつーにドンパチと発砲している。

「Fuck off」（消え失せろ）

男は更にわめき散らしながら路地裏のモルタル製の柱の陰に隠れながらぶつぶつとつぶき始める。その間にも謎の集団はそこら一帯を完全に制圧し始めた。近寄れないようにざわざ人ごみ付近に銃を乱射し、ストリートチルドレンの脳天を平然と銃底で叩き気絶させたところをどしどし抱えて一箇所に纏め、ワイヤーで括り始めた。

「What're they doing? Shit for brains!」(何してるんだ奴ら?このクソ共が!)

「いたぞ! 捕らえる!!」

リーダーらしき周りとは異なったエンブレム入りの上着を着た男が叫ぶ。それに呼応しわらわらと虫のように集団が集まり最終的にはすっかり取り囲んでしまった。そして青年に英語でリーダー格が呼びかける。

「Can you speak Japanese? Can you understand what I said?」(日本語は喋れるか?俺の言ったことが理解できるか?)

「I hate Japanese. Hey never speak to me! Fuck you!」(日本人はクソ以下だぜ。二度と話しかけるな豚野郎!)

すると、リーダーらしき男はしばらく考え込むように口元に指を遣ると突然顔を上げた。どうやら青年の叫びを完全に無視することにしたらしい。

「I have just one reason to catch you. Say nothing and kneel on the ground right now. I have no time to tell you why.」(お前を捕まえる理由は一つしかなくてね。時間も惜しいんでさっさと何も言わずに跪け)

そう言い放つと右手をさつと挙げ、衆人に合図を送る。それと同時に一斉にハンドガン構える。

「Don't worry. I'll not kill you now. Freeze as much as you can. I wanna finish soon!」(心配するな。今すぐ殺すつもりはない。出来うる限り動くな。わたしも早く終わらせたい!)

そして、その右手を思いっきり振り下ろした。ズガガガガガと

いう音と共にあつとう間に青年は土煙と硝煙の臭いに姿を掻き消された。きつ過ぎる鼻腔を刺すような刺激臭が一带に充満する。それは、通常勝利を意味する臭いだ。

「はいはいはいストップストップ！ あんまり撃ちすぎるといくら麻酔薬入りの特殊弾だからって死んじゃうよ！！」

完全に余裕をかました表情を浮かべたリーダーダ格が気だるげに少し神経質そうに歩いてる。もちろん、彼だけが余裕を持っていたわけではない。その場にいた全員が成功を確認していた。

「それじゃ、誰か回収しておけよ。そっちのカスガキ共も取り合えず一緒に持つて来よ！」

そのまま、ワンボックスカーの後部座席に乗り込んだ。それが生死の境をさまよう原因なることも知らずに……。ただ単に、気紛れに、特段意味もなくしたそれだけの行いのせいで男はとんでもない怪我を被る羽目になった。

数にして数十弾、ただ飛んできたのも併せれば100を優に超える弾丸をぶち込まれても未だ青年は気を失っていなかった。それどころかこの一方的なショットアウトにとんでもない不満を抱いていた。必ず報復しなければ、舐められてしまう。この街でそう見られることが死に直結することを感覚的に男は知っている。

「Kill them all！ Geeks！ They looked down on me！」（ぶつ殺す！あのクズ男共！舐めた目で俺を見やがって！）

握っていたミリタリーナイフに傍にあつた酒瓶を叩き割って中の液体で浸した。麻酔がき始め朦朧とする意識をナイフの刃で太ももを刺して持ちこたえさせると脇にあつた使捨てのライターで火を着けた。アルコールが高いために一瞬で炎の剣になる。

「Explode them all！ Fuck you！！！」
（燃えちまえ！ファックユー！！！）

ブン投げられたナイフは狙いを誤らずに真直ぐバンパーの真下辺りの通気口の隙間を無矢理ぶち抜きエンジンに突き刺さった。

刹那
み込まれた。

轟音と業火に車両が飲

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1774ba/>

EXPERIMENT{螺旋ゲーム}

2012年1月4日15時54分発行